

『くらしと協同』 第 50 号に寄せて

若林 靖永 (くらしと協同の研究所理事長、佛教大学教授)

2012年6月に創刊された『くらしと協同』の巻頭言「創刊に寄せて」で、的場信樹理事長(当時)は、その前身の『協う(かなう)』について触れ、「変化することに怠りなく、しかもその中でたえず研究所の原点を模索するという基本的な姿勢である。研究者や編集者として伝えたいことと読者や会員のニーズとのバランスのとり方を模索してきた結果が今回の『くらしと協同』の創刊だと思う。」と述べている。

『くらしと協同』では、毎年、研究所の総会時に実施される総会記念シンポジウムの特集号が組まれるとともに、さまざまなテーマの特集等を組んできた。これまでのテーマは「震災の復興」「生協の合併」「地域に愛されるお店」「国際協同組今年」「おしゃべりパーティー」「人事システムと職員教育」「生産者からみたパートナー」「協同組合が結ぶつながり」「戦争、平和と協同組合」「コープ商品」「ゴミ問題」「大学生協」「事業における協同」「農協」「研究所」「組合員と生協が会う場所」「格差社会」「協同組合間協同」「持続可能性」「少数派のくらし」「民営化」「新たな流通」「食でのゲノム編集技術応用」「サステイナブル・コミュニティ」「くらしと協同を訪ねて」「コロナ」「地域と発電」「個性を認め合える社会」「情報伝達」「子育て」「酪農」「生活の中の化学物質」などである。

まさに、今号で第50号となる『くらしと協同』の歴史からは、編集者による訪問調査などによって、そのときどきの社会課題と協同組合、協同について掘り下げ、読

者や会員へ伝えたいメッセージを明確にするように努めてきたことがわかるだろう。「『攻め』の姿勢をもつ雑誌」(久保ゆりえ「連載 協同組合系研究所の逐次刊行物より」②『季刊 くらしと協同』『生活協同組合研究』Vol.520、2019年5月、57ページ。)と評価されるように、研究者、編集者が、生協や協同組合に限らず、くらしや地域でのさまざまな協同の実践に注目して、調査訪問をすすめてきた。

また、くらしと協同の研究所は発足時から院生事務局等、若手研究者に機会を与え、『協う』の編集などにも取り組んできた。『くらしと協同』も、若手研究者による研究・交流をすすめる「コーポラティブ・ラボ」と連動し、特集等の企画、編集を担当している。これは若手の問題関心を尊重してそれから学ぶとともに、若手自身がさまざまな調査機会等を通じて学び成長することをめざしている。

これからもこの精神、運営を引き続き大事にしてほしい。そして、複雑化し、グローバルとローカルがつながり、多様な利害が対立し、フェイクニュースが飛び交い、民主主義の危機がすすむ現代社会においては、ますます「調査」「研究」の重要性が増している。『くらしと協同』がくらしと協同組合、協同に関する調査と研究を推進するとともに、調査と研究を担う若手を育成する場として充実していくことを期待している。さらにそこに研究者のみならず協同組合組合員・役職員もまた参加担当されることもお願いしたい。